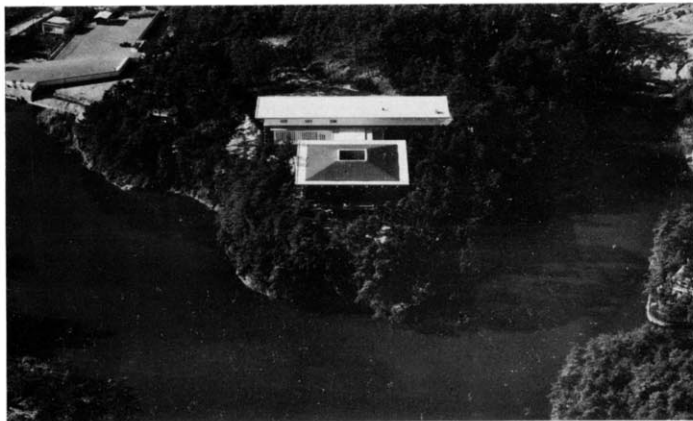




『文華苑』の輪郭

大和文華館々長 矢代幸雄

大和文華館は「美のための美術館」として構想及び設計され、そしてまた、その方針をもって運営されている美術館であります。もう一つ大和文華館の性格として、私が初めから願っている目標として、大和の自然美、ひいてはまた日本の自然美の一端でもよいから、心に親しく味わえるようなことを、何とか大和文華館との関連に於てやってみたいと願っていたのであります。その結果、たとえ文華館の敷地内という極めて限られた地域にしても、そこに心を配って、わざとらしくない、強いて言えば、多少の庭作りのような工夫でもして、この理想の一端でも実現出来たならば、と空想をめぐらせて居るのであります。もっとも庭作りと言ったところで、お茶人の庭とか、公園的の庭園にするとかという、設計的な庭を造るとは大変に違った考え方で、私は大和文華館の菅原池（一蛙股池）に取囲まれた松山の丘陵地にふさわしき多少の雑木や雑草の類を、恰かもこれ等の種子が自然にこぼれ落ちて来て勝手に芽を出したように、散らし植えて、この土地柄らしく野趣横溢といったような、言うならば一種の自然庭園、自然が自らにして成した庭園のようなものにしたいと考えるのであります。

芸術美の淵源は、最近の抽象芸術の流行より以前は、殆んどすべてが自然美から発生したように思われますが、自然の研究は十九世紀以来いつの間にか主として科学の領分となって、多少芸術的鑑賞より離れ、科学的なる調査と研究の方向に、鋭く進んで行ったようであります。自然科学者もその自然の研究に打ち込むに至る動機には、深き自然に対する愛とか驚異とかに発した場合も珍しくなく、また勿論、自然科学は大切な学問に相違ありませんが、科学的研究は専ら冷静にして正確なる学問的調査を出発点とし、その分類、整理、系統付け等に努めるようになるのであって、これは自然美そのものに打ち込んで芸術的に、謂わば何ということなしに、人間的に、味わいかつ愛着して行く——それに友達のような親しみを感じ、それを心の歓びや養いとして受け入れて行くというような人間の情感的接触からは、多少遠ざかったというようなこと

ろがあります。これは誠に残念なことで、科学的知識は知識として無論尊重すべきであり、私なども自然科学は大好きであります。同時に人間の無邪気な心が唯だ何となく自然を美しいと感じ、それを心の故郷のごとく、温かくまたなつかしく受け入れ、ここに心の素肌を以て親しんでいくという如き人間的接触の心境からは、多少違って来たのではないのでしょうか。それで私のような無学な者には、私達の周囲の何でもない野山に、何ということなしにすがすがしく生えている一茎の草、その上に咲くであろう一朵の花、等々を同じ友達仲間と感じ、またそのあたりに飛んで来る鳥の声や虫の鳴く音などに、友達の呼び声に耳を傾けるように聞き入るといような、情感的の親しみを感ずるようになれば、それはまた一層人間生活を豊かにし、また力づけもし、どのくらい人生を幸福にしてくれるか量り知れぬものがあろう、と思うのであります。

大和文華館の敷地は、小美術館の敷地としては一万坪近くあり、且つその周囲は大きな菅原池に取囲まれているので、気分的にはせま苦しい感じはしませんが、それにしても構内の坪数としては、あまり大きいものとは言えません。文華館の建物を頂点にして、起伏ある松林の丘陵が多少の変化を以ていろいろに延びているに過ぎません。しかし、それでも、その間には様々の種類の植物が繁っていて、注意深くそれ等を愛し且つ眺めるならば、面白いことがいくつも発見されて来ます。丘の一方には、池の水がちりめん波を絶えず織り成して、光線を小さきみに千変万化させてくれています。私はこの文華館周囲の松山続きの庭園一庭園というにはあまりに取りとめのない山林の一つのたたずまいに過ぎませんが一それを、「大和文華苑」と名付けて、その大和文華苑をあまり学術的にこだわらない鑑賞本位の楽しい植物園のようにしたいと思うのであります。例えば、月ヶ瀬や吉野に名高い梅や桜も多少池畔の一隅に植えて欲しいし、また奈良の名物である紫や白の藤の花も房を垂れて咲いてもらいたいと思っています。また、東大寺の良弁椿、白毫寺の五色椿等々、大和にはいろいろの美しい由緒ある椿の銘木がありますから、それも多少集めて椿の園に育てるのも、一つの楽しみになるに相違ありません。大和の秋には、小さな赤い実がいっぱい枝についている柿の木が方々にありますが、ああいいう大和になくはならない風物詩のような柿の木も欲しいのですが、ああいいう木はなかなか移植しにくいとか聞いて、がっかりしています。あやめ池の名の起源は知りませんが、或はその辺にあやめ菖蒲がよく育つためかも知れません。それを以て文華館周囲の池に、あやめや菖蒲の類を育てて、初夏には濃い紫や白い彩りの大きな花をつけてもらえば、光琳や乾山好きの私にとっても幸福であり、そして又、光琳や乾山の名品を持っている大和文華館の陳列品とも関係があって面白いでありましょう。その他、文華館開館以来、構内のいろいろの草叢だの路傍などには、すすきはもとより豊富にあり、その他、萩だの月見草だの、いろいろの花をつける植物を、折に触れ思いつくまに植えさせていますから、そのうちには四季の変化と共にいろいろに可愛い花をつける雑華園になるに相違ありません。

まあ、こんな風に大和文華館を中心として、構内周囲の丘陵地や池畔には、大和の四季のいろいろの花が咲いたり散ったりする「文華苑」が広がるならば、大和文華館は、博物館美術館に往々にして離れ得ぬ、息のつまりそうな重苦しい空気から解放されて、自然と人生に於ける美を愛する心を、内外に養成し発育させてくれるのではないのでしょうか。

私は以上のように将来の夢を抱いて、大和文華館及びそれを取囲む「文華苑」を育てていこうと願いもし、また、楽しみにもしているのであります。何卒皆様の精神的御協力を得たいと思っております。

季刊 美のたより No.2

昭和42年 7月1日

発行 大和文華館